

氏名・(本籍) 田中 智樹 (静岡県)

学位の種類 博士(文学)

報告番号 乙 第58号

学位授与年月日 2018(平成30)年3月19日

学位授与の要件 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)

第4条第2項該当

論文題目 『古事記』神話的世界の構造に関する基礎研究

審査委員(主査) 佐藤 隆

福井佳夫

柳沢昌紀

審査概要および審査結果

I 審査概要

2017年6月12日(月) 田中氏より教学部大学院事務課に学位授与申請書類ならびに博士学位請求論文が提出された。

2017年6月14日(水) 文学研究科委員会にて学位請求論文審査にかかわる博士後期課程委員会の開催を決定した。

同日 博士後期課程委員会を開催し、論文受理を決定するとともに、学位審査委員会の設置を決定し、審査委員3名を選出した。

主査：佐藤 隆

副査：福井佳夫

柳沢昌紀

同日 第1回審査委員会を開催(センタービル9階第5会議室)し、審査日程、審査方針を確認した。

2017年10月4日(水) 第2回審査委員会を開催(センタービル9階第5会議室)し、各委員の審査状況の報告と今後の審査内容の調整をした。

2017年10月11日(水) 博士後期課程委員会に審査経過および今後の予定を報告した。

2017年10月21日(土) 最終試験(口頭試問)実施(研究棟、日本文学科共同研究室)。午後1時半から2時半まで。本人の学力を確認した後、提出論文の試問に入った。全体構成の

- 特に序章と終章について議論が集中し、一部書き直しを求めた。構造構成論としての各論では、論証方法や編纂者をどのように扱うかの確認を求めた。
- 同日 第3回審査委員会を開催（研究棟、日本文学科共同研究室）し、最終試験を実施した後の各委員の意見を調整した。
- 2017年11月8日（水） 第4回審査委員会開催（センタービル9階第5会議室）し、これまでの審査内容について総合的に確認をした。
- 同日 審査結果を文学研究科長に報告した。
- 同日 審査結果を文学研究科博士後期課程委員会に報告した。
- 同日 書面を以て一週間後に審査論文公示を告知した。
- 同日 学位請求論文公開発表会開催を告知した。
- 2017年11月15～21日 審査論文公示（一週間）。於研究科長室。
- 2017年12月6日（水） 学位請求論文公開発表会（午後4時半～5時半、542教室）を開催し、充実した質疑応答の時間を持ち、参加者も発表者も、より論文の理解を深めることができた。
- 2017年12月13日（水） 博士後期課程委員会で投票により合と判定した。
- 同日 文学研究科委員会に結果を報告し合格を承認した。

Ⅱ 論文内容と審査結果

1. 田中氏の論文は、従来の『古事記』『日本書紀』を互いに補完する上代文学資料として使用する研究方法、たとえば神話に関して、「記紀神話」「日本神話」と称して一括に論ずる立場に対して、三卷（上中下）から成る『古事記』を完結した一つの作品とし、さらに現在ある『古事記』をそのまま受け入れる作品論的立場で論究する。全編は序章・第一～三章・終章から成り、『古事記』における神話的世界の展開を、神の移動等に注目し、その構造体を作り上げた『古事記』編纂者の構想の究明を図り、上代文学における『古事記』のさらなる位置を確定する論文である。

序章

本論文のねらいを表明するとともに、本論文で用いる「世界」について言及する。「世界」を、上巻の神々が存在し活動する「葦原中国」を中心とした「高天原・黄泉国・葦原中国・夜之食国・海原・根之堅州国・常世国」と、中下巻の天皇が治める「天下」とに大別し、前者を「神話的世界」後者を「現実的世界」とする。『古事記』が「神話的世界」それも葦原中国から「現実的世界」に変化することに重点を置いて構想されていることは周知のことであるが、田中氏の論文は新たに葦原中国以外の高天原・黄泉国などや、「天下」の「世界」にも十分に目を向けるべきとする。

第一章 『古事記』上巻における世界と神話

「伊邪那岐命・須佐之男命・建御雷神・猿田毘古神と天宇受売命」に言及する。まず、神話的世界の全体像を把握するために、世界間を行き来する神々の移動形態に注目し、それらを詳細に分析し、

A 上位者の命令に基づく移動

（組織的な往来により示される秩序立った関係性、境界が明確、閉鎖的、遠ざかる世界）

B 自らの意志に基づく移動 C 経緯を記さない移動

（自由な往来を許容する関係性、境界が曖昧、開放的、近い世界）

の三種類に分類する。そして、『古事記』編纂者はこの多様な神の移動を段階的に、或いは並行して用いることで、固定的な構造ではなく、物語に応じて変化しうる柔軟で可変的な世界を描き出しているとする。

伊邪那岐命の移動は、「高天原」「葦原中国」「黄泉国」におよび、AとBの移動形態が用いられる。これは『古事記』が、神々の起源に位置する重要な役割を担う伊邪那岐命をあえて移動する神とすることで、神話的世界の構造が可変的で、画一的な世界ではないことを象徴的に表わしているとする。

須佐之男命の移動は、「葦原中国」に始まり、「高天原」「根之堅州国」と三つ世界におよび、BとCの移動形態が用いられている。『古事記』がこの須佐之男命の自らの意志に基づく移動によって、自由な往来を可能とする開放的な世界を描き出し、その須佐之男命の自由な世界間移動によって、『古事記』の混沌とした原初の神話的世界の構造を具現化しているとする。また「知」と「治」の用字法からも、須佐之男命の移動の様子を確認している。

建御雷神は、天孫降臨において活躍する神であるが、三つある記事の最後の記事は、中巻「神武記」にある。ここでは「神話的世界（葦原中国）」から「現実世界（天下）」へ変質する様子を示すために、夢という世界が利用され、また、自らではなく身代わりの「横刀」を降ろすと言う方法を用いているとする。

猿田毘古神と天宇受売命の邂逅神話も天孫降臨にある。つまり「高天原」から「葦原中国」への移動において、神に仕える存在の「天宇受売命」を、天皇に仕える存在の「猿女君」に変化させていることに注目する。これは編纂者が、中巻以後の天皇が治める世界を示す「天下」を考慮に入れた変化であるとする。また、神話的世界である「葦原中国」が、現実的世界である「天下」へと変化する直前の位置に配置されていることにも注目する。

第二章 神話的世界の変遷と「天下」の形成 上巻から中巻へ

『古事記』中巻の「海原・垂仁記・仲哀記・応神記」に関心を示し、「神話的世界」からの変遷と天皇が治める世界を示す「現実的世界（天下）」の形成に言及する。

田中氏の論文は、「天下」が天皇が治める世界であるならば、上巻の神話世界からの離脱や神話性の払拭といった作業が必要である。『古事記』に対置する『日本書紀』は、「神話的世界」を「離れていく世界」とするが、『古事記』は、中巻以降の「現実的世界」の「天下」にも、「神話的世界」が深い関わりを持って描かれており、『古事記』特有の構造になっているとする。そしてこの構造を利用することで、拡大し整備されたり変化し続ける「天下」の形成のあり様に言及する。

たとえば、「海原」は三貴子分治の物語で登場する。その神話的世界で明確な位置づけをされなかった「海原」が、中巻以降の様に描き出されているかに言及する。そして、「海原」は「現実的世界」の「天下」においても、天皇に統治されない「神話的世界」として描かれていると捉えて、『古事記』の構造論に言及する。

垂仁記では、「天下」の充実の様子が、垂仁天皇の成長によって語られているとする。仲哀記では、天皇の支配領域がいよいよ海を越えることに注目するとともに、「天下」の拡大において託宣を中心に描かれていることに関心をもち、特に潔斎された場を重視する託宣を、人の世における「神話的世界」の再現と捉え、神託は「神話的世界」に保証された新しい「天下」の創出方法であるとする。

第三章 変質する「天下」 中巻から下巻へ

『古事記』下巻に注目し、「仁徳記・安康記」に関心を示す。『古事記』が編纂時の現在、すなわち現実世界を意識し描かれていることを明らかにした。

仁徳記には、現実世界の政における職掌が物語に反映されたり、「聖帝之世」を創出するために独自に口子臣を創出しているとする。安康記では、天皇の不可侵性を説くため、敢えて逆説的に天皇弑逆の物語を載録しているとしている。

2. 田中氏の論文は、『古事記』上巻の神話が全体の源流として存在するとする従来の考え方に対して、編纂者が上巻で神話を描くとき、上巻で神話が完結する世界とともに、中下巻の天皇が治める「天下」をも視野に入れて構想したとする。つまり、「神話的世界」を「現実的世界（天下）」に緩やかに溶かし込む方法も利用して編んだと述べる。『古事記』研究が飽和的な現状の中で、新しい視座を持った意欲的な構想論である。

3. 本審査委員会は、提出された博士学位請求論文が博士（文学）の学位に相当する論文であり、また、論文提出者が専門領域に関する十分な学識と研究能力と資質を有していると判定した。